



あ
でも 溺愛

責め

執着攻め で
落とすまで

ない

執着攻め

ブラブ

焦らし

婚約破棄された没落令嬢は、冷酷
な王太子に拾われクリ責めで甘く
落とされるまで離さない

R18

2026・9・29

目次

本文

ロシュ侯爵家の大広間は、ろうそくの甘い匂いでむせ返っていた。

私は胸元の古いレースを指でつまんで、息を整えた。

母の形見のレースだ。今夜のために、自分で繕い直した。

父が男爵の位を取り上げられて、ひと月になる。

北の砦へ運ぶはずだった兵糧を、父が売り払って金にした。そういうことにされた。

兵糧は届いた。荷車に乗っていた私が、この目で見た。

そう訴えても、娘の言うことだと誰も取り合わなかった。

それでも今夜、レオン様との婚約が正式に発表される。

侯爵家に嫁げば、父の件も調べ直してもらえる。

私はそう信じていた。

「セレス・アルノ」

壇の上から、レオン様が私の名を呼んだ。

金色の髪を撫でつけ、客たちへ胸を張っている。

恋人を呼ぶ声ではなかった。

使用人を呼びつけるときの声だった。

「この婚約は、なかったことにする」

広間のざわめきがぴたりと止んだ。

作りかけた笑顔が頬の上で固まった。

「罪人の家と縁を結ぶわけにはいかない。
それに、この女には男がいる」

「……え？」

「去年の冬だ。北の宿場で、この女が兵と
宿へ入るのを見た者がいる。バルト、話して
やれ」

レオン様の隣で、子爵家の次男が得意そう
にあごを上げた。

「間違いありませんよ。冬至の次の晩、雪
の中でした。兵の腕にすがって、宿の戸をく
ぐっていきました」

扇の陰で、貴婦人たちがくすくす笑った。
違う。

あの冬、私は北にいた。

でも男と会うためじゃない。

「私は、兵と遊んでなんか……」

「言い訳は聞かない」

レオン様が壇を下りてきた。

私の左手をつかみ、薬指の指輪を引き抜く。

関節に引っかかって、皮がむけた。

指輪は彼の上着のポケットに消えた。

「持参金も用意できない。操も守れない。
破棄の理由はこれで足りるだろう」

誰も何も言わなかった。

膝が震え出した。

下がろうとして、ドレスの裾を踏んだ。

よろけても、手を貸す人はいない。

床の石の冷たさが薄い靴底からしみてくる。

家を出るとき、母に言われた。

うつむかないで。何があっても。

なのに私の目は床の石の継ぎ目ばかり見ていた。

「面白いことになったな」

低い声が広間の空気を割った。

柱の陰から出てきた人を見て、誰かが息をのんだ。

黒い髪を後ろで束ね、黒いマントを肩に掛けている。

灰色の目がろうそくの火を映して冷たく光った。

第一王子、ヴィクトル殿下だった。

「殿下。これは我が家の内輪の話でして」

レオン様の声が上ずった。

殿下はレオン様を見なかった。

私の、皮のむけた薬指を見ていた。

「罪人の娘なら、城で預かる。逃げられては困るからな」

「……は？」

「俺が引き取ると言った。聞こえなかったか」

広間がどよめいた。

レオン様の顔が赤くなり、それから引きつった笑いに変わった。

「殿下がわざわざ、こんな女を？ お手を
わずらわせるほどの者では」

「お前が捨てたものを、俺が拾う。何か困
るのか」

レオン様は口を開けたまま、言葉を探して
いた。

殿下はもう、そちらを見ていなかった。

殿下は人垣を抜けて、私の前に立った。

近くで見ると、背が高い。

私の目の前に、ちょうど彼の胸の留め具が
あった。

殿下はマントを外し、私の肩に掛けた。

ずしりと重い。

まだ体温が残っていて、鉄と煙の匂いがした。

「歩けるか」

「……はい」

「なら、顔を上げて歩け」

殿下は私の肘をつかんで、出口へ向かった。

すれ違いざま、客のひとりがささやいた。

罪人の娘を、城に？

殿下は足も止めずに答えた。

「罪人かどうかは、俺が決める」

馬車の扉が閉まったとたん、殿下の手が変わった。

さっきまで荷物のように私の肘をつかんでいた手が、そっと離れた。

代わりに私の左手を取って、皮のむけた薬指に自分のハンカチを巻いた。

「痛むか」

「……平気です」

「平気な顔じゃない」

ハンカチを結ぶ指が、ひどく丁寧だった。

広間で「罪人の娘」と言った人と、同じ手とは思えない。

「殿下は、どうして私を」

「そのうち分かる」

「今、知りたいです」

「泣きそうな顔で聞く話じゃない」

言われて初めて、目の奥が熱いのに気づいた。

こらえたのに、涙がこぼれた。

ハンカチを巻いた手の甲に、ぽつりと落ちる。

殿下はそれを親指でぬぐった。

「広間では冷たくする。そのほうが、お前の身を守れる」

「……今は？」

「今は馬車の中だ。誰も見ていない」

殿下は私の手を離さなかった。

ごつごつした手のひらだった。

指の付け根に、白っぽい古い傷が走っている。

まるで、ひどいしもやけの跡だ。

王子様の手とは思えない。

どこかで、こういう手を握ったことがある気がした。

思い出す前に、馬車が止まった。

王城の東翼の部屋は、思ったより広かった。

暖炉で薪がはぜていて、やっと指先に血が戻ってくる。

戸口で、侍女頭が私をじろりと見た。

頭の先から靴の先まで、値踏みする目だった。

殿下はその侍女頭に言った。

「この人の扱いを間違えたら、お前の部屋はもうない」

侍女頭は青い顔で頭を下げ、下がっていった。

扉が閉まる。

殿下は鍵をかけなかった。

「寝台は好きに使え。明日の朝、人をよこす」

「殿下」

帰ろうとした背中に、声が出ていた。

自分でも驚いた。

「私、兵と宿になんか入っていません」

殿下が振り返った。

灰色の目が何か言いたそうに細くなる。

「知っている」

「……どうして、知っているんですか」

「知っているから、知っていると言った」

答えになっていない。

言い返そうとしたら、殿下が戻ってきて、私の頬に指を当てた。

耳の横の髪をすくって、耳にかける。

「今夜、お前に触れたい」

「……え」

「最後まではしない。お前が自分から欲しがるまで、中には入れない。約束する。嫌なら今そう言え。すぐ出ていく」

返事がすぐには出なかった。

嫌だと言えば、この人は本当に出ていくの
だろう。

そうしたら私はこの広い部屋でひとり、今
夜のことを思い出す。

レオン様の声や、貴婦人たちの笑い声や、
指輪を抜かれた痛みを。

「……嫌じゃ、ないです」

言ってしまった。

殿下は目を伏せて、小さく息を吐いた。

笑ったのかもしれなかった。

殿下は私を寝台の端に座らせ、自分は床に
膝をついた。

王子様が私の前にひざまずいている。

それだけで顔が熱くなった。

肩からマントがすべり落ちる。

殿下はそれを拾わずに、私のドレスの裾を持ち上げた。

「あ……」

裾が足首からすね、膝へと上がっていく。

上がるたびに、灰色の目がそこを見る。

暖炉の火がむき出しの肌を赤く照らした。

「見ないで、ください」

「見る。今夜のお前は、全部覚えておく」

大きな手のひらが膝の内側に置かれた。

そのまま、太ももの奥へすべっていく。

指が下着の縁にふれたとき、私は思わずその手首をつかんだ。

「やめるか」

「……ちがい、ます。びっくりした、だけで……」

手首をつかんだまま、離せなかった。

殿下は私の手を振りほどかなかった。

つかまれたまま、指先で下着の上から真ん中をなぞった。

「ひっ……」

布ごしに、じわっと熱が押し当てられる。

割れ目に沿って上下になぞられると、お腹の奥がきゅっと縮んだ。

「もう湿ってるな」

「うそ……っ」

「うそじゃない。ほら」

指が布の上からぐっと押しこんだ。

ぬちゅ、と小さな音がした。

自分の体から出た音だと分かって、耳まで熱くなる。

「や、やだ……音……」

「いい音だ。もっと聞かせろ」

指は下着の上をすべって、少し上の、小さくとがったところで止まった。

そこを布ごしに、くるくると撫でられる。

「あっ、あ……そこ、なに……っ」

「クリだ。自分で触ったこともないのか」

「な、ないです……っ、あ、んんっ」

そんな場所があることさえ、ぼんやりとしか知らなかった。

撫でられるたびに、腰がびくっと跳ねる。

つかんでいる彼の手首に、爪を立ててしま
う。

「痛いかな」

「いたく、ない……へん、なの……」

「変でいい」

殿下は下着の縁に指をかけて、横にずらし
た。

暖炉の熱い空気が濡れたところに直接当た
る。

「やっ……見ないで……っ」

「見ないと触れない」

殿下の目がそこから動かない。

「ひくひくしてるな。お前のまんこ」

「そんなこと、言わないで……っ」

触られるより、言葉のほうが恥ずかしかった。

なのに、その言葉を聞いたとたん、奥からとろりとあふれたのが分かった。

殿下の指が直にそこへ触れた。

ぬるりとすべる。

濡れた入り口をなぞって、あふれたものをすくい、それをとがったクリに塗りつける。

「ひぁっ、あっ、あ、あ……っ♡」

布ごしとはまるで違った。

指の腹でクリを押しつぶされると、目の前がちかちかする。

くちゅ、くちゅ、ちゅく。

濡れた音が薪のはぜる音にまじった。

「腰が逃げてゐるぞ」

「だって、だって……っ」

「逃げるな。こっちに押しつけてこい」

命令だった。

広間で「罪人の娘」と言ったときと同じ、
低い声。

なのに今は体の奥が勝手にその声に従った。

腰が前に出て、彼の指に自分から擦りつけてしまう。

「そうだ。上手だ」

「んう……っ、ほめ、ないで……っ」

「ほめたら締まった。ここが」

指先が入り口に浅くもぐった。

ぬぷ、と音がして、指の先だけが中に入る。

「あ……っ、はいつて……っ」

「指だけだ。約束は守る」

浅いところを、ゆっくり出し入れされる。

ちゅぷ、ちゅぷ、と音が続いた。

中を押し広げられるのがこわいののに、抜かれそうになると、奥が指を追いかけて締まる。

「中が、俺の指に吸いついてくる」

「ちが……っ、あっ、あぁっ」

親指がクリに戻ってきた。

中の指と外の指が同時に動く。

「あっ♡ だめ、それ、だめっ、いっしょは……っ♡」

「だめなら、やめる」

指がぴたりと止まった。

私はとっさに、彼の手首を自分のほうへ引き寄せていた。

「……や、やめないで……」

言ってから、自分の声に驚いた。

殿下の目が細くなった。

「今のは、お前が選んだな」

「……っ」

「なら、最後までイかせてやる」

指がさっきより速く動き出した。

中の浅いところの、お腹側のざらりとした場所を、指の腹で押し上げる。

同時に、親指がクリをこねる。

「ひっ、あっ、あっ♡　そこ、そこ、へんっ、へんになる……っ♡」

「なれ」

「あっ、あっ、きちゃう、なにか、きちゃう……っ♡♡」

「イケ、セレス」

名前を呼ばれた、その瞬間だった。

お腹の奥で、何かがはじけた。

背中が反って、足の指がぎゅっと丸まる。

「あああっ♡♡　あっ、あっ……っ♡」

びくん、びくん、と体が勝手に跳ねた。

中が彼の指を、ぎゅうぎゅう締めつける。

止めたいのに止まらない。

その間も、殿下の親指はクリの上で、ゆっくり円を描き続けていた。

「あっ、も、もう……さわらな……っ♡」

「まだ震えてる。全部出しきれ」

波が引ききるまで、指は離れなかった。

気がつくと、私は寝台に仰向けに倒れていた。

天井の梁がぼやけて見える。

うまく息が吸えない。

殿下が私の中からそっと指を抜いた。

ちゅぷ、と音がして、私は両手で顔を覆った。

「顔を隠すな」

「……無理、です……」

「広間ではうつむいていた。ここでは隠すな」

指の間からのぞくと、殿下は濡れた自分の指を眺めていた。

それから、それを口に含んだ。

「なっ……！」

「甘くはないな」

「当たり前です……っ」

思わず言い返すと、殿下の口の端がほんの少し上がった。

広間では見せなかった顔だった。

殿下は立ち上がり、私の下着を元に戻して、裾を下ろした。

床のマントを拾って、私の体に掛ける。

彼のズボンの前が張っているのが見えて、私はあわてて目をそらした。

「殿下、は……その、いいんですか」

「今夜はいい。お前が覚えていれば、それでいい」

殿下は扉へ向かった。

取っ手に手をかけたところで、振り返らずに言った。

「明日の夜も来る」

扉が閉まった。

足音が遠ざかっていく。

私はマントにくるまったまま、しばらく動けなかった。

脚の間がまだじんじんしている。

自分の体が自分のものではないみたいだった。

寒くなって、マントを胸まで引き上げた。

そのとき、内ポケットで紙がかさりと鳴った。

取り出すと、黄ばんだ古い紙だった。

折り目がすり切れて、破れかけている。

北の砦 兵糧受け取りの控え

届け主 アルノ男爵家

受け取った人の署名は、インクがにじんで読めなかった。

その下の余白に、小さな字で書き足してある。

スープ番 セレス

私の字だった。

去年の冬、北の宿場で書いた字だ。スープを作った者の名も書いてくれと、凍えた兵士に頼まれて。

父が兵糧を届けた証拠だった。

侯爵家が「届いていない」と言い張り、父の位を奪った、その兵糧の。

どうしてこれを、殿下が持っているのだろう。

朝の鐘で目が覚めても、脚の間には昨夜の熱が残っていた。

寝返りを打つと、まだ少しひりひりする。

思い出ただけで顔が熱くなって、私は枕に顔を押しつけた。

侍女頭が盆を置いた。

銀の椀に、薄いスープが底のほうに少しだけ入っている。

パンはない。

「……これだけですか」

「殿下のお言葉です。東翼の分は、これで足りると」

侍女頭は目も合わせずに言った。

私は匙を取った。

塩もほとんど効いていない。

お腹は鳴るのに、ちっとも満たされなかった。

家の台所では、朝になるとパンの焼ける匂いが廊下まで流れてきた。

母は焦げたところを必ず自分で食べた。

ここには石の匂いしかない。

昼前に、書斎の控え室へ呼ばれた。

私は殿下のマントをきれいにたたんで、腕にかけて行った。

ポケットの紙は入れたままにしておいた。

控え室では殿下が廷臣と書類を広げていた。

私が入っても、顔も上げない。

「殿下。アルノの娘が参りました」

「そこに置いておけ。用が済んだら帰す」

置いておけ。

荷物と同じ言い方だった。

廷臣がにやりとして、私を上から下まで眺めた。

「これが噂の、殿下の預かり物ですか」

「そうだ。話しかけるな」

殿下の声は氷みたいに平らだった。

昨夜、私の名前を呼んでイかせた人の声とは思えない。

私は唇を噛んで、部屋の隅に立った。

廷臣が出ていくと、私はマントを差し出した。

「お返しします。ポケットに、紙が入っていました」

殿下の手が止まった。

初めて、まっすぐこちらを見た。

「見たのか」

「見ました。あれは、父が兵糧を届けた控えです。どうして殿下が」

「忘れろ」

「忘れられません。あれがあれば、父は」

「今は使えない」

殿下はマントを受け取ると、ポケットに手を入れて、紙があるのを確かめた。

それだけだった。

「使ったら、お前がもっと汚される。今はそれしか言えない」

扉の外で足音がした。

殿下はもう書類に目を戻していた。

私は何も言えないまま、控え室を出た。

廊下の角で、ロシュ侯爵家の従者たちが固まって立っていた。

私に気づくと、わざと聞こえる声で話し出す。

「王子を寝台に誘ったらしいぞ」

「さすが、兵の腕にすぎる女だ。手が早い」
足が止まりそうになった。

そのとき、後ろから大きな影が前に出た。

今朝から扉の外に立っている、ガルドという護衛だった。殿下がつけてくれたらしい。

頬に古い刀傷のある、熊みたいな大男だった。

「そこ、どけ」

それだけで、従者たちはばらばらに散った。

ガルドは振り返り、ぶっきらぼうに言った。

「気にするな。……いや、気にはなるか」

「……なります」

「だろうな」

ガルドは私の手をちらりと見た。

荒れた指先を。

何か言いかけて、やめた。

昼も、同じ薄いスープだった。

今度は小さなパンのかけらが添えてあった。

私はそれを半分だけ食べて、残りのスープと一緒に、机の真ん中に置いておいた。

わざと、よく見える場所に。

夜。

扉が叩かれた。

「入るぞ」

殿下だった。

昼の上着を脱いで、シャツの袖をまくっている。

本当に来た。

そう思っただけで、胸がどきんと鳴った自分が悔しかった。

殿下の目が机の上の椀で止まった。

「なんだ、これは」

「夕食は来ませんでした。これは昼の残りです。殿下のお言葉で、東翼の分はこれで足りると聞きました」

「俺はそんなことを言っていない」

殿下は廊下に向かって、侍女頭を呼んだ。

侍女頭が来て、椀を見て、顔色を変えた。

「わ、私は、そのように伺って……」

「誰にだ」

侍女頭は答えなかった。

殿下は静かに言った。

「お前、ロシュ侯爵夫人の遠縁だったな」

侍女頭の肩がびくりと跳ねた。

「今夜のうちに城を出ろ。荷物は後で送らせる」

「殿下！ 私は長年お仕えして」

「長年仕えて、腹をすかせた客に薄いスープを出す女は、城にいない」

侍女頭は私をにらみつけた。

「侯爵家を敵に回して、ただで済むと思わないことね」

「もう回っています」

私の口から、勝手に言葉が出た。

侍女頭は唇をわななかせて、出ていった。

しばらくして、若い侍女が息を切らして入ってきた。

そばかすの浮いた、丸い顔の子だった。

「ロツテと申します！ 今日からお世話をいたします！ あの、パンと、鶏の煮込み

と、りんごを……厨房から、あるだけもらってきました！」

湯気の立つ煮込みの匂いに、お腹が盛大に鳴った。

ロッテが目を丸くし、殿下が横を向いた。

肩が小さく震えている。

「……笑いましたね」

「笑っていない」

「笑いました」

「食え。冷める」

私は煮込みを食べた。

熱い。おいしい。

パンで皿の底まできれいにぬぐうと、殿下がぽつりと言った。

「よく食うな」

「お腹が、すいていたんです」

「見れば分かる。気づかなくて、悪かった」

王子様が謝った。

私はパンをくわえたまま、固まってしまった。

食べ終わると、殿下は私にショールを羽織らせて、書斎へ連れていった。

内側から鍵をかける。

机の上のランプが積まれた書類の端を黄色く照らしていた。

「ここなら、誰も入れない」

「……あの紙のことを、話してくれるんですか」

「話さない」

「ずるいです」

「ずるいのは知っている」

殿下は私の腰を持ち上げて、机の端に座らせた。

書類がかさりと鳴る。

寝間着の薄い布ごしに、机の木の冷たさがお尻に伝わった。

「代わりに、昨夜の続きをする」

「そ、それは、代わりになりません」

「なら、やめるか」

また、それだ。

やめると言えば、本当にやめる人だ。

私は答えられなくて、目をそらした。

殿下は私のあごに指をかけて、こちらを向かせた。

「前を、自分で開けろ」

「え……」

「寝間着の前だ。お前の手で開けろ」

寝間着の胸元には紐が結んであるだけだった。

指が震えて、なかなかほどけない。

殿下は手伝わなかった。

ただ、じっと見ていた。

やっと紐がほどけて、布が左右に落ちる。

ランプの光の中に、私の胸がむき出しになった。

「……っ」

「隠すな」

胸を隠そうとした腕を、殿下が机の端に押さえつけた。

灰色の目が私の胸を見ている。

見られているだけで、先がきゅっと固くなっていくのが分かった。

「触ってもいないのに、乳首が立ってきたな」

「い、言わないで……」

殿下は顔を寄せて、左の乳首を口に含んだ。

「ひあっ……！」

熱い。

舌で、先をころころと転がされる。

ちゅっ、と吸われるたびに、背中がびくんと跳ねた。

「あっ、あ、そこ、へんな感じ……っ」

「こっちも」

右の乳首は指でつままれた。

つまんで、くいと引っばって、離す。

また、つまむ。

口と指で、左右をばらばらにいじめられる。

「んっ、あっ♡ や、りょうほう、だめ……っ」

「昨夜は下ばかりだったからな。今夜はここを覚えろ」

じゅる、と音を立てて吸い上げられた。

歯が軽く当たる。

痛いのか気持ちいいのか分からなくて、頭がくらくらした。

「ひっ、ん、かんじゃ、だめ……っ♡」

「噛んでない。当てただけだ」

「あてるのも、だめ……っ、あぁっ♡」

胸しか触られていないのに、脚の間が熱くなっていく。

下着がじっとり濡れて張りついているのが分かった。

太ももをこすり合わせると、殿下がそれに気づいた。

「脚をもじもじさせて、どうした」

「な、なんでも……」

「下も触ってほしいのか」

「ちが……っ」

「なら、胸だけでイけ」

殿下は乳首を強く吸いながら、もう片方を指でこりこりとかね回した。

舌先で、先の小さな穴をほじるように押される。

「あっ、あっ、あっ♡ むね、だけなのに、なんで……っ♡」

「お前の体が素直だからだ」

「ひあっ、きちゃ、きちゃう、むねで、きちゃう……っ♡♡」

殿下が乳首を甘噛みした。

その瞬間、お腹の奥がきゅうっと縮んで、
ほどけた。

「んあぁっ♡♡ あっ、あ……っ♡」

腰が勝手に跳ねて、机の書類が床に散らばった。

私は殿下の頭を胸に抱えこんだまま、がくがく震えた。

息が落ち着くまで、殿下は乳首を口に含んだまま、じっとしていた。

やがて顔を上げて、私の濡れた胸を眺めた。

赤く腫れた先がランプの光でてらてら光っている。

「ここまで赤くなるのか」

「殿下が、したんです……っ」

「そうだな。俺がした」

満足そうな声だった。

悔しいのに、言い返せない。

ふと、殿下のズボンの前が目に入った。

昨夜と同じように、布が大きく持ち上がっている。

昨夜は「いい」と言って帰ってしまった。

「……殿下は、また、いいんですか」

「何がだ」

「そこ、です。苦しそうです」

殿下が少し黙った。

「お前が気にすることじゃない」

「気にします。私だけ、ずるいです」

殿下の目がわずかに揺れた気がした。

「……触るか」

「さ、触り方が、分かりません」

「教える」

殿下はズボンの前をくつろげた。

中から出てきたものを見て、私は息をのんだ。

太くて、長い。

先が赤黒く張りつめていて、血管が浮いている。

想像していたものと、全然違った。

「こ、これが……」

「ちんぽだ。見るのは初めてか」

「はじめて、です……こんなに、大きいんですか……」

「比べる相手がいないだろう」

殿下は私の手を取って、それを握らせた。

熱い。

手のひらの中で、どくん、と脈打った。

「ひゃっ、う、うごいた……」

「お前に握られたからだ」

殿下の手が私の手に重なって、上下に動かし方を教えた。

先のほうから、透明なしずくがにじみ出てくる。

それが私の指を濡らして、動かすたびに、にちゅ、にちゅ、と音が鳴った。

「こう、ですか……」

「……ああ。そのまま」

殿下の息が少しだけ荒くなった。

それに気づいたら、急に嬉しくなった。

私が握っているだけで、この人の息が乱れている。

「殿下、気持ちいい、ですか」

「聞くな」

「聞きたいです」

「……いい」

短い答えだった。

でも、耳の先がほんのり赤かった。

殿下は私の手を外させた。

そして私の膝を大きく開かせ、机の端に座った私の脚の間に、腰を寄せた。

「な、なに……っ」

「入れない。約束だ」

張りつめたちんぽが、下着をずらした私のまんこに、ぴたりと押し当てられた。

先っぽが濡れた割れ目の上をすべる。

ぬるっ、と入り口をかすめて、上のクリにぶつかった。

「ひあんっ♡」

「入れないで、擦るだけだ」

殿下が腰を動かした。

熱くて硬いものが割れ目に沿って、ぬるぬると前後する。

入り口をなぞって、クリを押しつぶして、また戻る。

「あっ、あっ♡ これ、これ、ゆびと、ちがう……っ♡」

「どう違う」

「あつい、の……っ、かたくて、あついのが、クリに、ごりって……っ♡」

ずりゅ、ずりゅ、と濡れた音が、書斎に響く。

私から出たもので、殿下のちんぽがどんどんぬるぬるになっていく。

入り口にさしかかるたびに、先っぽが少しだけ沈みそうになって、私の腰がびくっとすくむ。

「こわいか」

「こわ、い……でも、やめ、ないで……っ」

「入れない。安心しろ」

殿下は私の腰を両手でつかんで固定した。

そのまま、もっと強く擦りつけてくる。

クリがごりごりと押しつぶされる。

「あっ♡ あっ♡ また、またきちゃう……っ♡」

「一緒にイク」

「いっしょ、って……っ、あ、あああっ♡♡」

私がのけぞると同時に、殿下が低くうめいた。

お腹の上に、熱いものがびゅくっと飛び散った。

びゅっ、びゅるっ、と続けて。

へその上に、白いものが溜まっていく。

「あ……あつい……」

「……っ、はあ……」

殿下は私の肩に額を押しつけて、荒い息をついていた。

こんな殿下は初めて見た。

余裕のない、ただの男の人の息づかいだった。

しばらくして、殿下は自分のハンカチで、私のお腹をていねいに拭いた。

昨夜、私の指に巻いてくれたのとは別のハンカチだった。

「殿下、ハンカチを、どれだけ持ってるんですか」

「必要なだけだ」

「昨夜のは、まだ私の指に巻いてあります」

「知っている。返さなくていい」

殿下は私の寝間着の紐を結び直した。

結び目を、指でとんと押さえる。

それから、散らばった書類を拾い集めた。

王子様が床にしゃがんで紙を拾っている。

その背中がなんだかおかしくて、私は笑い
そうになった。

「笑ったな」

「笑っていません」

「笑った」

さっきとは逆だった。

殿下は書類を机に戻すと、扉の鍵を外し
た。

「明日、謁見の間でお前を紹介する。皆の前で、名前を呼ぶ」

「……預かり物では、なくなるんですか」

「ああ。もう預かり物じゃない。俺の客だ」

殿下は扉を開けて、廊下の冷たい空気を背に受けた。

そして、振り返らずに言った。

「うつむくなよ」

息が止まった。

うつむかないで。何があっても。

家を出るときの、母の言葉だった。

母と、私しか知らないはずの言葉だった。

「殿下、今の……」

扉はもう閉まっていた。

うつむくなよ。

殿下のあの声がひと晩じゅう耳から離れなかった。

母と私しか知らない言葉を、どうしてあの人が言えたのだろう。

考えているうちに、窓が白くなっていた。

「セレス様、起きてください！ 今日忙しいんですよ！」

ロッテが青いドレスを抱えて飛びこんできた。

夜明けの空みたいな、深い青だった。

「殿下が選ばれたんです。仕立て屋が何着も並べたら、全部見て、これにしろって。ひと言だけですよ。これにしろ、って」

「……殿下らしいわね」

「でしょう？ あ、背中を向けてください。紐をしめますから」

ロッセが背中中の紐を引くと、胸がぐっと押し上げられた。

鏡の中の私は辺境の男爵令嬢には見えなかった。

城に飾られた人形みたいだった。

「きれいです、セレス様」

「……そうかしら」

「そうです！ それに、昨夜のお食事、残さず召し上がってたって厨房で評判です。料理長が喜んでました」

「それは評判にならないで……」

私は胸元に、母のレースを留めた。

ドレスの青には少し古びて見える。

それでも、外す気にはなれなかった。

謁見の間の扉が開くと、香のくすぶった匂いが鼻をついた。

高い天井に、靴音がこだまする。

居並ぶ廷臣たちの目が、いっせいにこちらを向いた。

殿下は壇の手前に立っていた。

私に気づくと、ためらわずに歩いてきて、私の背中に手を添えた。

公の場で、この人が私に触れた。

それだけで、廷臣たちの間にさざ波のようなざわめきが走った。

「紹介する」

殿下の声は広間の隅まで届いた。

「アルノ男爵家の、セレスだ。今日から、
俺の客として城に置く」

預かり物、ではなかった。

客。

名前を呼ばれた。

みんなの前で。

背中に当てられた殿下の手のひらが、じん
わり熱い。

「殿下、罪人の娘を、客に？」

年配の廷臣が眉をひそめた。

「罪人かどうかは、まだ決まっていない。
決まるまでは、客だ」

殿下はそれ以上、何も言わなかった。

そのとき、柱のそばの人垣が割れた。

レオン様だった。

あの夜と同じように金髪をきっちり撫でつけ、口元に笑みを浮かべている。

「殿下。お言葉ですが、その女は私を裏切った女です。殿下のおそばに置くのは、殿下のお名前に傷がつくかと」

レオン様の目が私のドレスをなめるように見た。

それから、胸元のレースで止まった。

鼻で笑うのが分かった。

「そんな古いレースをつけて。殿下の客にしては、ずいぶんみすぼらしい」

指先が冷たくなった。

母の形見だ。

笑われるのには慣れているつもりだった。

でも、これだけは嫌だった。

うつむくなよ。

私は顔を上げた。

「裏切ったのは、みんなの前で私の指から
指輪を抜いた、あなたです」

広間が静まり返った。

レオン様の笑みが口元で固まった。

「……なんだと」

「指輪を返せと言うだけなら、手紙ひとつ
で済みました。わざわざ、あの広間の真ん中
で抜いたのは、あなたです。私の指の皮まで
一緒に」

私は左手を上げた。

薬指にはまだ殿下のハンカチが巻いてあった。

「お前、俺に向かって、よくも」

レオン様の口から「俺」がこぼれた。

すぐに気づいたのか、あわてて咳払いをする。

「……私に向かって、よくも、そんな口を」

どこかで、誰かが小さく吹き出した。

それが引き金になって、広間のあちこちで笑いがもれた。

さっきまで私を見ていた目が、今はレオン様を見ていた。

レオン様の顔が耳まで赤くなった。

「ロシュ家の嫡男が、女に言い負かされる
とはな」

殿下がつまらなそうに言った。

「用がないなら下がれ。ここは謁見の間だ」

レオン様は拳を握りしめ、何か言いかけて、結局何も言わずに背を向けた。

取り巻きたちがあわててその後を追った。

謁見が終わると、膝から力が抜けそうになった。

殿下は私の肘を支えて、廊下へ連れ出した。

「……言いすぎ、ましたか」

「足りないくらいだ」

「殿下は、何も言わなかったのに」

「お前が言ったからな。俺が言うより効いた」

殿下は前を向いたまま、ほんの少しだけ口の端を上げた。

殿下が廷臣に呼ばれて離れたあと、ガルドが私の隣に並んだ。

しばらく黙って歩いてから、ぼそりと言った。

「嬢ちゃん」

「はい」

「北の砦の、あの塩辛いスープ。あれは、まだ作れるか」

足が止まった。

去年の冬。

雪で閉じこめられた北の宿場で、私は荷車の塩と干し肉で、兵士たちにスープを作った。

汗をかいて凍えた人には、濃い塩味がいいと母に教わっていたから。

みんな、塩辛い塩辛いと言いながら、おかわりをした。

「どうして、それを……」

「俺は、あの冬、砦にいた。それだけだ」

ガルドはそれだけ言って、さっさと先に行ってしまった。

あの砦にいた人が殿下の護衛をしている。

殿下の手の、しもやけの跡。

マントのポケットの、兵糧の控え。

ばらばらだったものが、ひとつの形になりかけて、私は首を振った。

まさか。

夜になって、殿下に呼ばれた。

連れていかれたのは、東翼の奥の肖像画の廊下だった。

歴代の王や王妃の絵が、壁にずらりと並んでいる。

ろうそくの火が揺れるたびに、絵の中の目がこちらを見ている気がした。

「ここは、夜は誰も来ない。見回りが通るくらいだ」

「……殿下」

「なんだ」

「殿下も、あの冬、北の砦にいたんですか」

殿下は答えなかった。

代わりに、私の腰を引き寄せて、唇をふさいだ。

「ん……っ」

深いキスだった。

舌が入ってきて、私の舌をからめとる。

逃げようとしても、腰に回された腕がゆるまない。

息が苦しくなるまで離してもらえなかった。

「……ずるい、です……っ」

「知っている」

「答えてください」

「今は答えない。答えたら、お前は今夜、別のことを考える」

殿下は私の背中を、壁に押しつけた。

冷たい石がドレスごしに肩甲骨に当たる。

「今夜は、俺のことだけ考えていろ」

そう言って、殿下は私の足もとに膝をついた。

ドレスの裾を持ち上げて、その中に頭を入れる。

「えっ、で、殿下っ、何を……っ」

返事の代わりに、太ももの内側に唇が当たった。

ちゅ、と音を立てて、吸われる。

少しずつ、上へ。

下着の縁に歯がかかって、布が横にずらされた。

「まっ、待って、そこ、口で……っ？」

「今夜は、口でかわいがる」

熱い息がまんこにかかった。

次の瞬間、ぬるりとした舌が、割れ目を下から上へなめ上げた。

「ひあぁっ♡」

声が廊下に響いた。

絵の中の王妃様がこちらを見ている。

私はあわてて、自分の手で口を押さえた。

「んっ、んんっ……っ♡」

舌が入り口のまわりをぐるりとなぞる。

あふれた汁を、じゅるっとすすられた。

「んうっ、ふ、う……っ♡」

「声を殺すのか」

スカートの中から、くぐもった声がした。

「だ、だって、見回りが……っ」

「なら、殺してみろ」

舌がクリに届いた。

先っぽでつつかれ、下からすくい上げるように
にはじかれる。

ちろちろ、ちろちろ。

細かく揺らされて、膝ががくがく笑い出した。

「んっ、んっ、ふううっ♡」

指のすき間から、声がもれる。

殿下は唇でクリをまるごと包みこんだ。

ちゅうっ、と吸い上げられる。

「んんんっ♡♡ ふ、あ、すっちゃ、だめ……っ♡」

吸いながら、口の中で舌先がクリをはじく。

頭の中が真っ白になった。

脚の力が抜けて、壁を背中ですり落ちそうになる。

殿下は私の太ももを肩にかつぎ上げて、倒れないように支えた。

片脚が宙に浮いて、スカートの中で大きく開かされる。

「あっ、やっ、この格好、はずかし……っ」

「誰も見ていない」

「おうひさまが、見えます……っ」

「母上か」

殿下がスカートの中で低く笑った。

振動がまんこに直接響く。

「ひゃうっ♡ わ、わらわないで、ひびく……っ♡」

「母上の前で悪いが、やめる気はない」

じゅるるっ、とわざと大きな音を立てて吸われた。

そのとき。

廊下の向こうから、こつ、こつ、と足音が近づいてきた。

見回りの兵の靴音だった。

「……っ！ で、殿下、人が……っ」

殿下は舌を止めなかった。

それどころか、指を、入り口にぬるりと差し入れてきた。

「んぐっ……♡」

私は両手で口を押さえた。

足音が近づいてくる。

ろうそくの明かりが、角の向こうでゆらりと揺れた。

中で指が曲がって、お腹側のざらざらを押し上げる。

同時に、クリを強く吸われる。

「……っ、……っ♡♡」

声が出せない。

出せないぶん、快感が体の中で行き場をなくして、ぐるぐる回る。

足音が角のすぐ向こうで止まった。

「……誰がいるのか？」

見回りの兵の声だった。

息が止まった。

スカートの中で、殿下が舌をぴたりと止めた。

でも、指は入れたままだった。

中が勝手にひくひくと指を締めつける。

「……気のせいかな」

足音が遠ざかっていった。

完全に聞こえなくなったとたん、殿下の舌が、クリを思いきり吸い上げた。

「ひっ……ああああっ♡♡♡」

我慢していたものが、いっぺんにあふれた。

背中が壁の上で反り返り、浮いた足のつま先がぴんと伸びる。

中が殿下の指をぎゅうぎゅう締めつけた。

ぷしゅっ、と何かが噴き出した感じがして、殿下の顔を濡らした。

「あっ、あっ、ご、ごめんなさ……っ、なにか、でちゃ……っ♡」

「いい。全部出せ」

殿下はあふれたものを舌ですくい取った。

いったばかりの、敏感になったクリを、また舌でなぞる。

「ひいっ♡ ま、まって、いま、いま、だめえっ♡」

「まだだ」

「だめ、だめ、またっ、またきちゃうっ♡♡」

休ませてもらえなかった。

舌で押しつぶされ、吸われて、指で中をかき回されて。

さっきの波が引ききらないうちに、次の波が来た。

「あああっ♡♡ あっ、あ、ああ……っ♡」

今度こそ、膝から完全に力が抜けた。

殿下がスカートから顔を出して、崩れ落ちる私を抱きとめた。

そのまま一緒に、廊下の床に座りこむ。

殿下の口のまわりが、私ので濡れて光っていた。

「……殿下、顔……」

「ああ。お前の味だ」

「ふ、拭いてください……っ」

殿下は手の甲で口元をぬぐった。

その仕草が妙に男くさくて、私は目をそらした。

「見回りに、聞かれたかもしれません……」

「聞かれていたら、明日には城じゅうに広まっているな」

「そんな、平気な顔で……」

「平気だ。お前は、俺の客だからな」

殿下は私を膝の上に抱き寄せた。

石の床は冷たいのに、殿下の体は熱かった。

ズボンの前がまた硬くなっているのが、お尻に当たって分かった。

「殿下、また……」

「放っておけ。今夜はお前の番だ」

殿下は私の乱れた髪を、指ですいて整えた。

「来週、舞踏会がある。お前は俺と一緒に
入る」

「舞踏会……」

「入るときも、踊るときも、出るときも、
お前の名前を呼ぶ。俺の隣から離れるな」

「……踊れません。辺境で習ったくらいで」

「なら、習え。教える者はつける」

私は殿下の胸に額を押しつけた。

砦のことは今夜も聞けなかった。

それでも、この人の心臓の音は、ちゃんと速かった。

奥付

作品名 婚約破棄された没落令嬢は、冷酷な
王太子に拾われクリ責めで甘く落とされるま
で離さない

サークル いい子指導室♡

発行日 2026・9・29

レーティング R18